

# 野生イノシシにおけるアフリカ豚熱発生を想定した防疫演習

野村 伸

## 1. はじめに

アフリカ豚熱(以下 ASF)に感染した野生イノシシの死体が県内の山林で発見されたことを想定し、国が定める基本方針に沿った死体対応の作業手順等を実地演習により確認し、実行性と効率的・効果的な手法を検討したので、その内容を報告する。

## 2. 概要

欧州を中心に流行していた ASF は 2018 年にはアジアに感染が拡大。一昨年末には、わが国と航路でつながる韓国釜山で感染イノシシが相次ぎ発見されたため、国内への侵入が危惧されている。そこで昨年 3 月、野生イノシシでの ASF 感染を想定し、積極的死体捜索や死体対応等の初動防疫に関する国の基本方針（以下「方針」という。）が定められた。今回は、家畜防疫員、鳥獣対策担当職員、林務担当職員、市町村職員および狩猟捕獲関係者役の 5 名からなる死体対応班を組織し、1) 防疫拠点から死体発見地点への移動、2) 死体発見地点の消毒作業、3) 検体採材、4) 死体の運搬、5) 埋却と埋却地の保全対応までのイノシシ死体の処理を演習により確認するとともに(図 1)、猟友会等イノシシの生態に詳しい助言者から意見や参加者からのアンケートをもとに課題を抽出した。

## 3. 対応

本演習は、以下の 1) から 5) までの作業を実施した。

1) 防疫対策拠点にて、死体梱包に納体袋、死体運搬にソリを準備、防護服等その他必要資材は背負子にまとめた。山道入口で降車し装備を背負い、死体発見地点付近まで徒歩で移動した(図 2、図 3)。

背負い式の噴霧器で周辺を消毒した後、ブルーシートを設置し、その上で防護服等を着用してさらに死体発見地点まで移動した(図 4)。

2) 病原体の拡散防止のため死体周辺を消毒、さらにブルーシートを敷き、その上に納体袋を設置した。

3) 検体採材は納体袋内に死体を入れた後に耳片を採取した。

4) 体液漏出や破損防止のため納体袋を二重に梱包し、ソリに乗せて搬出した(図 5、図 6)。

5) 予め掘削しておいた深さ約 2 m の埋却溝に模擬死体を投入し、地面に野生動物の掘り起こし防止のためのネットを設置した(図 7)。

## 4. 演習から得られた課題と今後の計画

イノシシの行動範囲は広く、死亡イノシシがいる場合、死体発見地点の周辺は広範囲にウイルスに汚染されていると考えられることから、ウイルスの拡散防止のためには死体や作業場所だけでなく死体から 5 m 四方の消毒が必要であり、このため消毒液も多量に必要となることが分かった。さらに、演習では体重 60 kg

の模擬死体をソリで運搬したが、最大 100 kg超の死体の場合には急傾斜の山間部でソリに載せて運搬できない。現状でも装備品や携帯品が多く、さらに装備品や手間が増えると、1班5人体制では人員不足であることが分かった。

死体は焼却することが最も望ましいが、焼却施設への働きかけは未着手である。また、埋却溝を手作業で掘削することは、人力的・時間的にほぼ不可能であり、重機で掘削できる集合理却地を準備することが望ましいと考えられた。さらに、埋却地には野生動物の掘り起こし防止のためのネットを設置したが、強度不足で金網や漁網の設置が必要と、助言者から指摘を受けた。

今回の演習で多くの課題が浮き彫りになった。これまで主に対応してきた畜産現場と異なる空間での防疫作業であり、山間部での厳しい土地条件や自然環境、さらにイノシシやその他野生動物の習性等、未経験の領域での作業となることから、これらに精通した専門家からの助言をもとに実効性の高い防疫計画を作成していく必要がある。

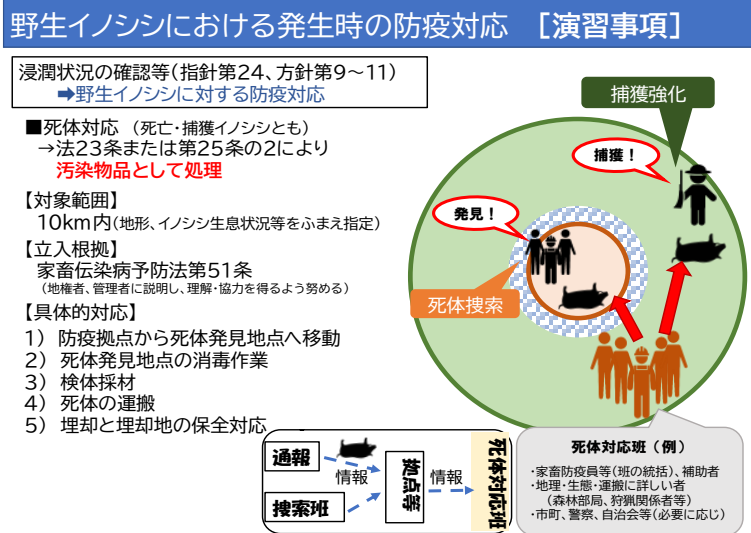


図1 演習事項

#### 死体対応演習

##### 【演習の流れ】

- ①防疫対策拠点から死体発見地点への移動  
 班員の確認、死亡イノシシ情報確認、  
 現地資材の準備、防護服等の着用
- ②死体対応  
 死体発見地点の消毒作業、納体袋の設置
- ③死体対応  
 検体採取
- ④死体の運搬  
 死体の梱包、搬出、運搬車両への積載
- ⑤死体の埋却と埋却地保全



図2 演習の流れ



④死体の運搬 死体の梱包と搬出



図6 死体の運搬

⑤死体の埋却と埋却地保全

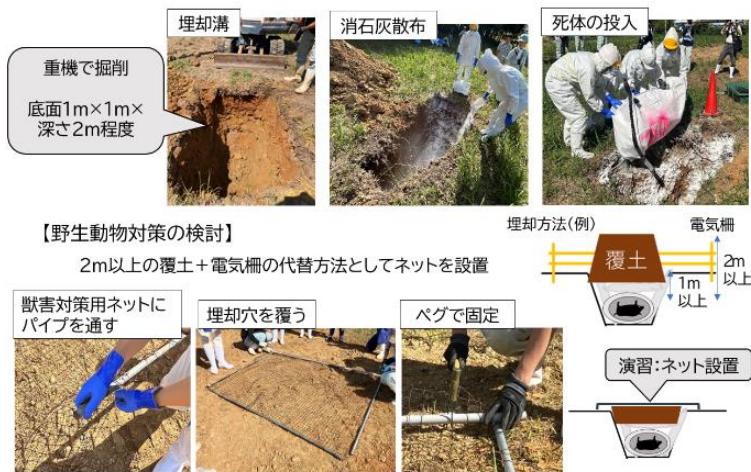


図7 死体の埋却